

東洋學報 第五十八卷第一・二号 昭和五十一年十二月

論說

「古今形勝之図」について

榎 一 雄

(一)

一九七三年六月、パリの国立図書館で「甲午仲夏（萬歴三二年五月、一五九四年六月十九日―七月十八日）山陰王泮識」という識語のある地図が発見された。横一九〇厘、縦一八〇厘の絹地にかかれた彩色の支那全図で、総題はないが、識語の後半に、

我國家全撫方輿、一統為盛、文襄桂公有地圖志、念菴羅公有広輿図、而皆載在方冊、天下為十五道、未若此図
広大悉備。一覽。而幅員形勝。萃在目前也、

と記しているのを見ると、自らパーチャスの複製した皇明一統方輿備覽(1)やこれからここに取扱おうとする古今形勝

「古今形勝之図」について 榎

之図の名が浮んでくる。この地図は一八六七年既に国立図書館に入っていたものであるが、何故か見落され、一九〇六年刊のクーランの「国立図書館支那・朝鮮・日本書等目録」第一冊にも著録されなかった。発見者デストムブ(Marcel Destombes)氏は早速これを一九七三年パリで開かれた第二九回国際東洋学者会議に紹介し、その概要を一九七四年一月刊の *Gazette des Beaux-Arts*, pp. 62-64 に掲げ、さらに一層詳しい記事を同じく一九七四年刊の *Journal Asiatique*, Tome CCLXII, 1/2, pp. 193-212 に発表した。前者はまだ見るに及ばないが、後者は鮮明な単色の複製(縦四三糎、横四五・五糎)がつけられているので、地図の規模内容を詳しく知ることができる。

王洋の識語には右の文章に続けて

吾友白君可氏得此図於嶺表、不敢自私而鋟梓以伝経世者、披図按索而疆理之宜修攘之策了然育中、未必不為是図為桂羅二公志與図之羽翼也、

と述べている。白君可氏は姓は可、名は白、或いは姓は白、名は可のことかと思われるが、このすぐ次に

君可氏

とあるので、姓は白、名は君可のようでもある。しかし、もし白君可であるのなら、何故これに氏をつけて白君可氏などと言ったのか、よく判らない。その何れにしても、明人の伝記索引の類には見当らない名である。この人が嶺表即ち広東・広西地方でこの地図の原図を入手し、政治に携るものに役立てようと、これを版に刻して刊行したという。従って、デストムブ氏の紹介したこの地図は白君可刊の地図を筆で絹地に描いたものである。そして

それは支那全土を一枚に示している点において、十五道の一一を個別に図示している桂萼や羅洪先の地図より便利であり、従って両者の羽翼たり得るというのである。また識語の末に

(両)都(十三)省而外、朝貢帰王、若朝鮮・安南等五十六国、速温河等五十八島、奴兒干・烏思蔵等都司所轄二百三十八区、靡不^レ列若星布云、

とあるのによると、朝鮮以下の諸国諸地方が記載されていたことになっているが、詳しい地名の標記された地図があるのは朝鮮と日本とだけである。安南については

安南属州四十一、鎮府十七、州五、県百五十七、

とあり、別に

安南・占城・三仏齊・真臘・爪哇・滿刺加・暹羅等夷、悉載正南海内、

とあるが、地図はない。奴兒干については、地図の一番上部に奴兒干都司と一行に書き、その右に二段にして建州衛から幹蘭河衛までの一〇二衛の名を上段に、阿真河衛から城計温衛に至る八二衛と兀者托温千戸所から敷答河千戸所に至る二十千戸所、合計一八四の衛と二十の千戸所との名が列挙されている。これは大明一統志卷八九(女直)に列挙されている所と同じである。しかし、烏思蔵はその名さえ地図に見えない。

この地図には、王泮の識語の後に、次の文章が続いている。

天下輿地図一本、旧行于國中、經變之後、不復見矣、近得印本輿地図八幅、山陰(王)泮識之、天朝視我東、不啻内服、雨露所霑、舟津所通、目不及覩、足不及履、則写之為図、一便覽了者、誠不可一日無矣、今因是図、

更考大明官制・一統志、則兩京及十三省、府臬州衛所、互有增減、^{〔?〕}此略正約于一、附以我國地圖、以見天朝一統之大於今為盛也、至於日本・琉球・奴兒・忽溫之屬、並誌其地、後之覽者、不可不知是圖所始、この大意は

支那全図については、以前国内に行はれているものが一つあったが、変「嘉靖二、三十年代（一五四二—一五六〇）の俺答や倭寇によるいわゆる北虜南倭の騷擾を言ったものであらう。この年代にいくつかの支那地図が製作刊行されたのは、そうした背景によるものであったと思われる」^{〔2〕}以後、「多くの人々が買求めた結果」市場に見られなくなった。ところが、最近刊本の輿地図八幅「八幅で一組になっているもので、これを貼合はせると、一枚の支那全図になるのであらう」を入手した。「浙江省」山陰の（王）泮が「それに」識語を書いていゝる。「そこでこれをここに写したのであるが、写すに当って、増訂を施した点が二つある。一つは東即ち朝鮮について詳記し、他は兩京及び十三省の府臬州衛の記載を新しくしたことである」。「そもそも」天朝は東方の地域を内地以上に重視し、恩恵を施し、舟車を通じているので、そこに實際行かなくても、その地域について知っていることは、誠に必要である。そこでこの地図によつてこれを図示し、更に大明官制・一統志^{〔3〕}を参考して、兩京及び十三省の府・臬・州・衛・所の増減を明かにし、それをこの地図に記して、天朝一統の最新の実情を示した。日本・琉球・奴兒（Nurgan）・忽溫（Hulan, Hulaun、即ち海西女直）^{〔4〕}等については、その地を記した。後のこの地図を覽る者は、それが如何にして出来たかについて、是非知ってほしい。

これによると、この地図は王泮の識語のある刊本地図をもとにして兩京及び十三省の地図を描き、大明官制・一統

志によってその内容を最新にし、朝鮮・日本・（琉球）・奴児（千）・忽（刺）温の地図を一層詳しくし得たといふのである。

デストムブ氏はこの地図は王泮が描かせたものであり、その識語に続くこの文章も王泮の書いたものであると考えているが、それは誤である。この地図は、王泮の友人白君可氏が入手した地図を王泮の識語とともに刊行したものを、王泮以後の何人かが増補を加えて描かせたものに他ならない。王泮の識語に続く文章は、この地図を描かせた人の加えた所と見るべきである。

王泮は浙江山陰の人。万曆八年（一五八〇）から十二年（一五八四）まで広東の省都肇慶に知府として在任した。

マテオ＝リッチがルッヂエリ（Michele Ruggeri 羅明堅）とともに肇慶に來たのは一五八三年九月中頃のこと、リッチの「キリスト教支那流入史」にはこの時王泮に晉謁し、好意的に受入れられた次第が詳記されている。リッチの居宅を訪れた王泮は、壁間に掲げられている（恐らくオルテリウスの）世界地図を見て興味を唆られ、リッチに請うてそれを写し、図中の欧文を支那文字に訳して貰い、後にこれを刊行した。これがリッチの手になる世界地図の第一号輿地山海全図である。デリアによると、その刊行は一五八四年十一月のことである。王泮はその時既に嶺西道按察副使に昇進していた。この地図はその原図は勿論、刻本もすべて失われてしまったが、章潢の圖書編卷二九に掲載されている輿地山海全図は、この刻本にもとづいたものといわれる。今回再発見された地図（の底本になった支那全図）に王泮が識語を記した甲午仲夏はそれからちょうど十年の後である。彼がこの時どういう地位に在ったか明かではないが、リッチに世界図を写させ、これを刊行した王泮は地図に深い関心をもっていた筈で、この

地図に識語を記したことは、決して偶然ではない。⁽⁵⁾

今、この図の原図を刊行者の名に因んで白君可氏図と仮称すると、白君可氏図の刊行されたのは、識語の書かれた万曆甲午仲夏（二二年五月）かそれ以後余り遠くない時期であつた筈である。しかし、それに該当すると考えられる地図の存在は知られてない。また、白君可氏図の底本になった、白君可氏がいわゆる嶺表で手に入れた八幅一組の支那全図が何であつたかについても、これを決定する手掛がない。

(二)

王泮は白君可氏図の識語の中で、桂萼の輿地図志や羅洪先の広輿図は、天下十五道を個別に示した地図帳で、一枚刷りの白君可氏図の参照に便利なるに若かないと記している。この中、桂萼の輿地図志については、世宗実錄嘉靖八年六月戊辰の条に

大学士桂萼進輿地図十有七、各有叙紀、上曰、覽図叙、明白切要、具見体国經濟至意、図本留覽、還写副、存留内閣、

とあり、皇明経世文編卷一八二に収められている進輿地図疏には

敢復即天下土地、分為十有七図、各具叙紀、又装成上献、

とある。十七図とは支那全国と兩京十三省の十五区域の図に四夷の図を加えたものを指したもので、皇明経世文編には同じ巻に右の疏に続けて、大明輿地図序・北直隸図序・南直隸図序・山東図序以下、貴州図序・四夷図序に至

る各図の序（即ち奏疏の叙紀）十七を収録している。デストムブ氏は桂萼のこの地図は滅びたと記しているが、王庸氏が指摘しているように、それは何鐘の修（又は脩）撰通考卷三に皇明輿図として収められて現存しているほか、江蘇省立国学図書館図書総目巻四三（七左）に

地輿図一卷、明安仁桂萼、乾隆刊本、一冊、

が著録されている。修撰通考は我が内閣文庫にも一部四冊が蔵せられ、万曆六、載在若雍撰提格、余月盈旬日（万曆六年戊寅、四月十日一五七八年五月二六日）の何鐘の序がある。その皇明輿図には、冒頭に大明一統輿図奏稿が掲げられている。それによると、この図巻は嘉靖八年六月一日進呈せられ、同月六日聖旨を賜ったのである。明代の諸目録に著録されている所を見ると、当時大に行われたのであろう。それはまた大明輿地指掌図とも呼ばれていたようである。⁽⁹⁾王庸氏は桂萼が李黙の天下輿地図を自著の如くにして奏進したのであろうと述べている。しかし、李黙の地図の内容が必ずしも明かでないので、なお断定は憚られる。

なお、桂萼は同じく嘉靖六年十二月に禹跡九州図を奉っている。事は世宗実録嘉靖六年十二月丁巳の条に詳記されているが、そこに記されている桂萼の上奏によると、それは四幅から成り、一つは禹が九州を区画してその山と水とを整理した大要、一つは山川と禹貢の田制・貢賦の大要、一つは禹貢の五服の制を示したものであるが、そのいずれも支那の現代図の上にそれらを重ねて描いたものであるという。これは大明一統輿図を下敷にしてはいるが、それとは別であること言うを俟たない。千頃堂書目巻六・明史卷九七（藝文志二）・万卷堂書目巻二によると、桂萼には別に歴代地理指掌四巻がある。これは脈望館書目（史類四、總志）にいう歴代地理図一本、近古堂書目

(上、地誌類) いう歴代地理指掌図であろう。蘇東坡に仮託されている輿地指掌図と同様、歴代の地理を示した歴史地図であろうが、これまた大明一統輿図を下敷としたものに相違ない。

王泮の識語に引かれているもう一つの地図は、羅洪先の広輿図である。これが明・清に行われた支那地図の大宗であることはいうまでもない。それについては既に多くのことが言われているが、ただ今日なお明かでないのは、その初刻の年代であって、嘉靖三十七年(一五五八)以前と推定されているのみである。⁽¹⁰⁾ 何鏜の修撰通考巻五及び六に広輿図又は皇明広輿図紀上下二巻として収められているものは、琉球図と日本図(鄭若曾著)との加えられていない、羅洪先著述の本来の形を示している点が珍らしいという。⁽⁸⁾ 王泮の見たのが日本図のなかった広輿図なのか、既にその加えられていたものなのか、明かでない。

しかし、嘗て満鉄大連図書館に蔵せられた嘉靖五年(一五二六)二月の楊子器の跋のある横八七六種、縦六六八種、平書きの大地図及び宮内庁書陵部所蔵の嘉靖五年楊子器跋の混一歴代国都疆理図は別として、一枚刷りの支那全図には、現在知られている限りでも、白君可氏図に先行するものが少くとも二種あったのである。

その一つは、

嘉靖丙申(十五年、一五三六年)、金谿呉悌校刊、崇禎辛未(四年、一六三二)、孫起枢重刊、

の刊記のある皇明輿地之図である。これは、一九三九年、中村拓博士が始めて学界に紹介せられたもので、⁽¹²⁾ 東北大学の狩野文庫と神宮庁の神宮文庫とにそれぞれ一枚ずつ所蔵されている。博士の実測によると、東北大学本は横六三・五種、縦一三五種、印刷面横五七種、縦一二二・五種、神宮文庫本は横五七・五種、縦一二四・五種、印刷面

横五七・二糎、縦五五糎である。この中、神宮文庫本の印刷面縦五五糎は上半の地図の部分の縦の寸法を記したものであろう。「次に引く朝鮮古地図展観目録には横五七糎、縦一二二糎と記されている」。その鮮明な図版が始め Monumenta Niponica, II 所載の博士の論文に図版第一として、後に博士の大著「鎖国前に南蛮人の作れる日本地図」に第二八図として掲載されている。それは東北大学本・神宮文庫本のどちらであるか記されていないが、一九三二年、京城帝国大学で催された朝鮮古地図展覧会の目録⁽¹³⁾によると、神宮文庫本は臨泉堂刊行のものであるという。私は神宮文庫本も、この目録も直接見ていないのであるが、皇明輿地之図は内閣文庫にも一本が蔵せられている。昌平校之印・浅草文庫の蔵印が捺され、頗る保存状態のよいもので、横五二・五糎、縦一二四・五糎、印刷面はそれぞれ五二糎、一二二・五糎であり、右の刊記の下に臨泉堂翻刻の五字が加えられている⁽¹⁴⁾。神宮文庫本と同じものであろう。そして中村拓博士の論文に掲げられているのは、東北大学本の写真であらう。従って、東北大学本が孫起樞重刊本で、神宮文庫・内閣文庫本は京都の書肆臨泉堂が更にそれを翻刻したものと考えてよいであらう。

この地図は上下二段に分かれ、上段に支那全図、下段は更に三段に分けられ、各段を五つに区分して両京十三省のそれぞれについて府州県の総数とその名称とが記してある。地図は、内閣文庫本についていうと、横五二糎、縦五五糎、地名の標記の少ない簡略なもので、中でも朝鮮・日本は粗略を極めている。日本は長方形の四隅を円くしたような形で示され、その中央に日本という二字を記してあるばかりである。朝鮮には合計十七乃至十八の地名が記され、鴨綠江が朝鮮を大陸部から分離し、半島であるかの如くに記されている。

吳悌（一五〇二—一五六八）は江西省撫州府金谿県の人。明末の名儒であり、名官でもあった。皇明輿地之図を

作ったことは記されていないが、康熙金谿県志卷六の本伝によると、天文図を製作して吳天文と呼ばれたことがあったというから、地図の製作があっても必ずしも不思議ではない。⁽¹⁶⁾しかし、王泮がこれに言及していないのは、入手していなかったためか、入手していても簡略言うに足らずと考えた結果かも知れない。

そしてもう一つの一枚刷の支那全図がここに取上げる天下形勝之図なのである。

(三)

天下形勝之図は、今日までに、少くとも八回世に紹介されている。

- (一)マドリード刊の雑誌 *Razón y Fe*, 1902, f. 464 に縮小されたファクシミルが出ていて、それをマテオ・リャチが一五八四年九月十三日の肇慶発のフィリップスのロマン (Jean-Baptista Roman, facteur des Philippines)宛の手紙の中で送っていたと言っている支那地図だとしている。⁽¹⁷⁾ (Joseph Brucker, Note sur une carte supposée du Père Ricci, Atti e Memorie del Convegno di Geografi-Orientalisti tenuto in Macerata il 25, 26, 27 Settembre 1910, Macerata; Premiato Stabilimento Tipografico, 1911, p. 85 et n. 1)

- (二)と同じものが 'Pastells 神父とコリン 神父編の「イエズス会フィリップス諸島布教史」の増訂本に用いられる。⁽¹⁸⁾ (Labor Evangelica, Ministerios Apostolicos de los obreros de la Compañía de Jesus, Fundación y Progresos de su Provincia en las islas Filipinas. Historiados por el P. Francisco Colín S.I., Nueva edición por el P. Pablo Pastells S.I., III, Barcelona 1902, p. 365. 18) Brucker によ

る。Brucker は本書をマニラ刊としているが、バルセロナとすべきもののようである。コリンの本書について
44 T. H. Pardo de Tavera, Biblioteca ósea Catálogo Razonado de Todos los Impresos, etc., Washington, 1903, p. 106 を用いた。

㉑Ettore Ricci, Del valore geografico dei commentarii de P. Matteo Ricci (Atti e Memorie del Convegno di Geografi-Orientalisti tenuto in Macerata il 25, 26, 27 Settembre 1910. Macerata: Premio Stabimento Tipografico, pp. 176—181). この一七六頁と一七七頁との間に、横十纏、縦二一・三(右側)一一・九(右側)纏に縮写された図が出ている。大体の地形と上部に古今形勝之図と横書された題名とが読取られるだけで、その他の文字は全く判読できない。

㉒D. Santiago Montero Díaz, Aportaciones geográficas del Gobernador de Filipinas Guido Lavezares (Boletín de la Sociedad Geográfica Nacional, LXXIII, 2. Febrero de 1933, pp. 67—91. 古今形勝之図の部分図(日本・南京・琉球を含む部分)と全図とが折込まれている。部分図は横十六・七纏、縦二一・二纏、文字の判読は十分可能。全図は横十六・二纏、縦二十・二纏、古今形勝之図という題記以外の文字の判読は困難である。なおこの論文は、マドリードのカルロス・サンズ(Carlos Sanz López)氏の好意によって、そのゼロックスコピーを入手することが出来た。サンズ氏はスペイン地理学界の耆宿で、地図史・コロンブス米大陸発見史・欧亜交通史・オーストラリア発見史・米大陸関係古刊本等についての論著が多い。⁽¹⁶⁾

㉓Pasquale D'Elia, Il mappamondo cinese del P. Matteo Ricci S.I., Città del Vaticano 1938. その挿図第三

② Mappamondo secondo le idee dei Chinesi. Ristampa il 22 dic. 1555 として横二〇・六糎、縦二五(右側)／＼二四(左側)糎に複写されている。複写刊行された他のどれよりも大きいが、中の文字はやはり古今形勝之図の標題以外は殆ど読取ることが出来ない。

③ H. Nakamura (中村拓), Les cartes du Japon qui servaient de modèle aux Européens au début des relations entre l'Occident et le Japon (Monumenta Nipponica, II, 1939.) その挿図第一に複写が掲げられている。横約十二糎、縦約十四糎。これ亦図中の文字の判読は不可能である。

④ Guia de la Exposición Oriente-Occidente (Primitivas relaciones de España con Asia y Oceanía), [Organizado pela] Dirección General de Archivos y Bibliotecas, Biblioteca Nacional. Madrid, Diciembre de 1958. その Cartografía の図版の第五に ② Mapa de China anterior a 1584. (Archivo de Indias. Sevilla) と題して横十一・五糎、縦一四(右側)／＼一三・五糎(左側)に縮写された図が出ている。標題以外の文字の判読が不可能なことは、他と変わらない。この目録はカルロス＝サンズ⁽¹⁶⁾氏の編集で、⁽¹⁶⁾ 展覧会目録としてのみならず、マドリードの国立図書館所蔵の十六、七、八世紀のアジア関係の古刊本調査のよき案内書でもある。

⑤ 中村拓「鎖国前に南蛮人の作れる日本地図」、一、東洋文庫、昭和四一年三月刊、第二九図。横一五・五糎、縦一八糎の縮写が出ているが、図中の文字は大部分読めない。

これら八つの中、地図そのものについて書いているのは、④に Carta de las costas de China mandada hacer por Guido Lavezares, Gobernador de Filipinas (1572—1575) (フィリッピン総督ギダ＝ラベサレスが命じて作成させ

た支那沿岸図」とあり、(五)に *Mappamondo secondo le idee dei Chinesi*, *Ristampato il 22 dic. 1555* (支那人の考え方に基いた世界地図、一五五五年十二月二日重版)とある図版の説明だけで、その他はすべて地図の寸法とか、地図がスペインに齎らされた来歴に関する外縁的な記事を掲げているにすぎない。要するに、この地図の性格が全く判らなかつたのであって、右の二つの説明にしても、これがギド・ラベサレスが作らせたものであるとか、これが支那人の構想による世界地図であるとかいうのは、全く見当違いである。こうした中であって、デストムブ氏が白君可氏図の写しに関する論文の中で、同じ時代に属する支那地図の一つとしてこれを挙げ、

セビヤのインド古文書館に一枚の木版の支那地図がある。一五五五年「嘉靖三四年乙卯」の日附がある。他に同じもののあることを知らない。一五七四年七月三十日、フィリップ二世にフィリップ・総督ギド・ラベサレス (Guido Laveares) が支那人通訳の一人に命じて作らせた「記事」をつけて送ったものである。〔縦〕一〇二糎、〔横〕九三糎。標題を古今形勝之図といい、〔全体についての〕説明はないが、図面に無数の記載がある。〔古今形勝之図という〕標題から推察すると、歴史に関する記述を含んでいるに相違ない。

と記しているのは、⁽¹⁷⁾他のどの記載よりも詳しいものである。いづれにしても、この図の明瞭な複写が出されていないために、その性格や内容がよく判らないまま今日に至っているのが実情である。私はセビヤのインド総古文館長バラ (Rosario Parra Cala) 女史の好意によって、本文の解説に堪える写真を贈られたので、これについて若干記してみることとする。

(一) 地図の所在。

「古今形勝之図」について 榎

天下形勝之図はセビアのインド総古文書館の所蔵で *Mapas y Planos Filipinas*, 5 という分類番号で整理されている。中村拓博士によると、博士が当時の館長タマヨリーフランシスコ (Juan Tamayo y Francisco) 氏の好意で実査された時には、硝子の雲版に入れて館長室に掲げてあったそうである。今でもそうであるかどうか明かでない。タマヨリーフランシスコ氏は今のパラ女史より二代前の館長で、一九三二年から一九三六年までその職にあった。⁽¹⁸⁾ エットーレリッチ氏はこれをマドリードのインド古文書館所蔵としているが、それは誤で、マドリードにはそういう名の古文書館はない。

(二) 地図の著録。

この図について最初に著録したのは、トレス (Pedro Torres Lanzas) 氏である。レタナ (W. E. Retana) の *フィリピン書誌* (*Archivo del Bibliófilo Filipino*, III, Madrid 1897, p. 448) に掲げられてゐる *ナレス* による支那大陸及びその地域の若干の島の地図。ギドリーラベサリが一五七四年七月三十日附の手紙とともに送って来たもの。「その手紙には」その内容についての記述又は説明がついている。支那文字で印刷されている。保存状態よろしからず。一〇〇×一一五釐。

⁽¹⁹⁾ とある。中村拓博士の実測によると、地図は大体横一〇〇、縦一一五釐で、地図部分は大体九三に一一〇二釐であるといい、パラ館長の通信にも一〇三に一一五釐と記してある。紙質については記述がない。この図は、後文に記すスペイン語の解説によると、河川の幾条かに色の塗られた彩色図である。このことはこれまで全く指摘されていない。或いは現在では彩色が消えてしまっているのかも知れないが、これ亦後文に記す、この図に基づいた図書編巻

三四の華夷古今形勝之図に黄河が黄、揚子江が藍に彩色されているのを考えると、この彩色も亦原図を踏襲したもので、原図が彩色図であることを裏づけるものであらう。

(三) 地図の刊行者及び刊行年月。

図の左下に

嘉靖歲次乙卯孟冬、金沙書院重刻、

とあるので、嘉靖三四年十月（一五五五年十月二六日—十一月三日）、金沙書院で重刻せられたものである。金沙書院は福建の龍溪県に知県林松が在任中（嘉靖二五—二九年、一五四六—五〇³⁰）に公舎を改造して設けたその金沙書院であらう。林希元の林次崖先生集卷十にその由来を記した金沙書院記がある。

(四) 地図編集の資料と編集の目的。

図の右方下端に次の如く記されている。

依統誌集此図、欲便於學者覽史易知天下形勢古今要害之地、其有治邑原無典故者、不克尽列、依（？）覽[?]編集、

これによれば、この図は統誌即ち明一統志を根拠に、學者が歴史を研究する場合、天下の形勢と古今の要害の地とについて容易に知り得るようにするために編集されたのであり、治邑の沿革の明かでないものは、その標出を省略した場合もあるというのである。但し明一統志だけでなく、前に記した皇明輿地之図の記事も参考されていることは、下に記す如くである。

(五) 地図の内容。

図はその上部に古今形勝之図の六字を横に標出し、その右に「府、壹百伍拾五、／州、貳百參拾捌、／県、壹千壹百貳拾玖、／衛、肆百玖拾參／所、貳千捌百伍拾肆、／宣慰司、壹拾貳、／宣撫司、壹拾壹、／招討安撫司、壹拾玖、／長官司、壹百柒拾柒」と記し、総題の右に「東方九夷、南方八蛮、西方六戎、北方五狄、／覽此図、当先以／本朝兩京拾參省、海宇／為???番禹貢九／州地?、然?後觀歷代／所觀??易於詳矣」と記している。

古今形勝之図が支那及びそれに直接する周辺の主要な現在地を標出して、その特に重要なものについて沿革を注記し、さらに空白を利用してその方面の歴史を簡単に記しているのは、正に一つの歴史地図で、古今形勝之図の名はそれに適しいものである。その沿革の説明記事が大明一統志に拠っていることは、例えば、東北端の方から見て行くと、

長白山、其山（綿亘千里）上有潭、周八十里、南流為鴨綠江、北流為混同、（括弧内の文字は消えている、図は、一統志卷二五遼東都指揮使司の条に（書編・地図総要によって補う）

長白山、在三万衛東北千余里、横亘千里、其嶺有潭、周八十里、淵深莫测、南流為鴨綠江、北流為混同江、（卷八九女直の条には長白山、在会寧府南六十里、横亘千里、高二百里、其嶺有潭、周八十里、南流為鴨綠江、北流為混同江、東流為阿也苦河とある）

に拠ったものであり（混同江が混同となっているのは、江の字を入れる余白がなかったからである）、その左の

女直、（古・肅）慎地、唐日（日の誤）黒水靺鞨、唐初乃臣服、置燕州黒水府、金太祖起此、滅遼設都於渤海、元初万户府、分領混同江南北水達達、迨入本朝、悉境帰附、立都司衛所二百余所、治地方、止於東北、地与契

丹相抗、以時朝貢、(括弧内の古肅の二字、図書
編・地図綜要によつて補う)

は、一統志卷八九女直の条に

女直、古肅慎之地、在混同江之東、後漢謂之挹婁、元魏謂之勿吉、隋唐曰黑水靺鞨、(中略)、開元中、以其地為燕州、置黑水府、(中略)、即(即)金鼻祖之部落也、(中略)、至阿骨打、始大易部、建国曰金、滅遼、設都於渤海、(中略)、金亡歸元、以其地曠濶、人民散居、設軍民万户府五、鎮撫北辺、(中略)、迨入本朝、悉境歸附、開元迄北、因其部族所居、建置都司一衛一百八十四所二十、(中略)、以時朝、

によつて文をなし、「止於東北、地与契丹相抗」の句を新たに挿入したものである。繁を煩うて一一の例示は避けるが、中には哈烈の条の如く、

誌云、東至肅州万余里、元附馬之子主其国、礼儀簡略、国有学舍、
と一統志によることを明示した場合もある。

また、図の最上部の中央に獯鬻・鬼方・玁狁・匈奴・突厥以下蒙古に至る諸民族の交替を記して、元の滅亡と明の統一とに及び、

此説註史、不載誌、

と記し、大宛を中心に烏孫・于闐・大月氏・康居・大夏・安息のことに触れた所にも、その文末に

此数地名在鑑、不載誌、

と記している。この中、前者は一統志卷九十韃靼の沿革の部分をも簡単にしたもの過ぎないのに、何故「不載誌」

「古今形勝之図」について

榎

といっているのか明かでない。後者については、烏孫・于闐・月氏・小月氏の名は一統志卷八九に見えているが、烏孫以下安息までの諸国を大宛との関係において記した記事はない。従って、これを「不載誌」としているのは正しい。

一方、一統志よりは呉梯校刊の皇明輿地之図に拠っている所がある。古今形勝之図の左上端（即ち西方の端）に鉄門関、其峽懸崖高數十仞、崎嶇深三里、西北過此、未詳其地、

とある。鉄門関 (Iron Gate) が今のウズベキスタンの東南部のクジタンスタウ・バイスンタウ両山間の相連続する所、シャーリサブズの平原とシェラバード河の平原とを結ぶデルベント村以西の山間の隘路を指していることは、⁽²¹⁾いうまでもない。右の記事に大明一統志卷八九撒馬兒罕の山川の条に、

鉄門峽、在渴石城西、懸崖絶壁、高数十仞、径路崎嶇、深二三里、夷人守此、名鉄門関、唐書云、自焉耆西五十里、過鉄門関、疑即此、

とあるものと相通じる個所が多いのは明かであるが、これには「西北過此、未詳其地」に当る文字はない。それにしても、鉄門関のことは大唐西域記卷一や慈恩伝卷二に見えるのが最初であるが、唐書には記されていない。一統志のもとになった寰宇通志卷一一七（玄覽堂叢書 統集所収）によると、

鉄門峽、在渴石西、懸崖絶壁、高数十丈、径路崎嶇、深二三里、夷人於此防守、名鉄門関、

とだけあって、唐書云々のことは見えない。この部分が一統志編者の妄りに加えたものであることは明かである。ところが、皇明輿地之図を見ると、鉄門と標した下方に

自和寧西北五十余里、至金山、又西二百里、至陰山、又西北數千里、至鉄門、過此不可詳、

とある。これによると、古今形勝之図の「西北過此、未詳其地」は、この傍点を施した部分によって文を成していることが知られる。そう思って両図を比較すると、古今形勝之図の右上端黒竜江の上部に

自(?)此東方、尽大山遠林、不可殫記、

とあるのは、皇明輿地之図のこれに当る個所に「過東皆小大山遠林、至巨海、不可殫記」とあるのに拠ったものであり、古今形勝之図の左下端に

此路往西域天竺諸國、

とあるのは、皇明輿地之図のそれに相応ずる個所に「此路往西域天竺諸國」とあるのを採ったものに相違ない。これらは古今形勝之図が皇明輿地之図を参考している明証であろう。朝鮮について見ると、古今形勝之図に記されている七つの地名は、皇明輿地之図に見える十七(又は十六)の中の七つを採用したものである。そしてその最北部に「南朝鮮、北女直」、中部に「元尽界慈悲嶺此」、唐「都護府名」の左側に「古曰高麗、平壤後改爲西京」と皇明輿地之図には見えない説明を附加え、鴨緑江を日本海にまで貫通させて朝鮮半島を島であるかのように誤解させるものになったという皇明輿地之図を訂正し、鴨緑江を正しい形で標出しているのは、古今形勝之図が皇明輿地之図に盲従せず、これに訂正を加えていることを示しているものである。

しかるに古今形勝之図は皇明輿地之図に正しく半島として記されている山東半島を島の如くに改めてしまっている。これは幾度か開鑿を試みたが成功しなかった膠東河(元史世祖本紀至元十七年)・膠萊河(明史河渠志)即ち

所謂膠萊運河を宛かも開通していたかのように記した結果である。そしてその山東の南方に四格に囲んで

成化壬辰（八年、一四七二）以（前）、漕運由此路、三五日至成山甚便、今從閘（河）、海運不通、

と記している。括弧に囲んだ前と河の二字は、今の図ではよく読めないのを、図書編・地図綜要の華夷古今形勝之図で補ったものである。この文章も古今形勝之図だけにあるものであるが、海運に代って運河による漕運が行われていることを説いているのは、自らこの図の編集が明代の膠萊運河の開鑿が主張せられた時期に行われたことを示すものである。それについては次節に記す。但し明一統志卷二五登州府山川の条及び皇明輿地之図に共に明記してある成山の位置が、この図には全く示されていないのは、片手落ちである。それはいずれにしても、これ亦古今形勝之図に明一統志以後の知見の入っている一証であろう。

(五) 図の編者と編纂の年代。

それでは図の編者は何人であろうか。嘉靖歲次乙卯孟冬（三十四年十月、一五五五年十月二六日十一月二三日）は重刻の年であるから、その初刻がこれ以前にあるべきはいうまでもない。

籌海図編の凡例に挙げられている参過書籍を見ると、先づ参考した地図十九種を列举し、そのうち

皇明地理十六図 南京都察院本

大明地理指掌図 大学士桂萼

歷代地理指掌図 宋学士蘇軾都御史順之

広輿図 状元羅洪先

沿海七辺図 侍郎錢邦彦

の次に

古今形勝図 都御史喻時

を挙げている。また千頃堂書目卷六（三左）に

李默天下輿地圖一卷

呉学儼地圖綜要三卷

に並べて

喻時古今形勝図

を著録している。ここにいう古今形勝図は恐らく古今形勝之図と同じものを指しているであろう。

明代には喻時という人が少くとも二人いる。その一人は四川内江の人で、弘治九年（一四九六）の進士。祁陽県の知県から南（京）戸部主事・監察御史を経て、正徳中（一五〇六—一五二二）松江知府に拔擢せられた。²²⁾この喻時には都御史の経歴はない。また、前に述べたように、古今形勝之図は嘉靖丙寅（十五年、一五三六）刊の皇明輿地之図を参考しているから、それ以後の製作である。従って、その頃果してこの喻時が生存していたか否か、頗る疑わしい。もう一人の喻時は河南光州の人で、嘉靖十七年（一五三八）の進士。呉江の知県から御史に拔擢せられ、河東都転運塩使司に転じ、さらに応天府丞に移り、南（京）太僕寺卿・副都御史を経て、南（京）戸部侍郎に昇り、隆慶四年（一五七〇）、六十五歳で歿した。²³⁾この喻時は任官して間もない頃御史になり、晩年副都御史に任ぜられて

いる。その年代と官歴とから考えて、古今形勝図の著者都御史喻時はこの人であろう。籌海図編に副都御史とせず都御史といったのは敬意を表してのことであつたに相違ない。但しこのことは必ずしも古今形勝図が喻時が副都御史であつた時の著作であることを意味するものではない。それは籌海図編の成つた嘉靖四二年（一五六三）の頃、喻時が副都御使の職にあつたからであろう。喻時は当時五八歳、恐らく籌海図編の編者鄭若曾と著作上のことで見を交換したこともあつたのではないかと想像される。嘉靖乙卯（三四年、一五五五）に再版され、初版はそれ以前に刊行されている筈の古今形勝之図即ち古今形勝図は、喻時が副都御史であつた時の作でないことは勿論、御史であつた時の著であるとも言えない。

古今形勝之図の編纂年代に一つの手掛りを与えるのは、この図に山東半島を南北に縦断する膠萊運河が完成したかの如く記されている事実である。明史卷八七河渠志によると、正統六、嘉靖十一・十七・十九・二十一・三十一、隆慶五、万曆三、崇禎十四・十六の各年度にその開鑿が献議された。この中、正統と喻時がまだ進士になつていない嘉靖十一年と隆慶以後とは問題外であるが、嘉靖十七年・十九年の提案が單なる提案の段階で葬り去られたのに対し、嘉靖三十一年の工科右給事中李用敏の献議はこれを支持する官僚があり、実地調査の結果、費用が巨額に上るの實現を見なかったが、最も熱心に採上げられた意見であつた。世宗実録卷三九二嘉靖三十一年十二月乙未の条にその詳細が、明史河渠志にその要領が見える。ただその中止が決つたのが何時か明かでないが、恐らく翌嘉靖三二年の何時かであろう。しかし、この提案を背景に古今形勝之図が作られたとすると、嘉靖三四年早くも重刻されたことになり、やや早すぎる嫌がある。しかし、前後の事情を考慮すると、古今形勝之図の編纂と初刻とは嘉靖三二年

に行われたとして大過ないであろう。

(四)

古今形勝之図（嘉靖三十四年、一五五五、重刻）は、支那全図としてはこれに先行する桂萼の大明一統輿図（嘉靖八年、一五二九）、吳悌の皇明輿地之図（嘉靖十五年、一五三六、刊）より遙かに詳細である。広輿図の初刊は一五五八年以前であろうというが、その支那全図はこれまた天下形勝之図より余程簡略である。王泮の識語（万曆三二年、一五九四）のある支那全図の原図が何時のものか不明であるが、それが古今形勝之図より遙かに詳細精確であることは、両者を比較すれば容易に知られる。これらに伍して、古今形勝之図がその存在理由を主張し得るのは、それが支那歴史地図で、極めて簡単粗雑ではあるが一目して土地の沿革、周辺の諸民族の興亡が知られることである。桂萼の歴代地理指掌の内容は明かでないけれども、古今形勝之図は蘇東坡に仮託せられている歴代地理指掌図よりは遙かに精密で、特に周辺の諸民族の記事のある点に特色がある。

北虜南倭の侵寇に騒しかった明末には、こうした歴史地図が多くの人々から求められたのであろう。その証拠の一つは古今形勝之図は華夷古今形勝之図としてまず章潢の圖書編卷三四に、更にそれに基いて朱国達等の地図綜要に、殆どそのまま採用されていることである。

圖書編は嘉靖四一年（一五六二）から万曆五年（一五七七）に互って編纂されたものである。その巻帙の歴大なために久しく刊行されず、章潢は万曆三六年（一六〇八）八十二歳で死去、その忠実なる門人万尚烈の努力によっ

て万曆四一年（一六一三）に刊行された。章潢の年譜のある本がこれで、後、天啓癸亥（三年、一六二三）の岳元声の序文と圖書編纂修の始末を述べた潜初子の圖書編家藏記を卷首につけたものが出されている。これには年譜はない。但し本文は版式・内容ともに全く前者に同じである。前者の刊年は改訂内閣文庫漢籍分類目録（二九五頁）に記す所であるが、京大人文科学研究所漢籍分類目録（六一二頁）には「万曆三十一年新建万尚烈等刊本」を挙げている。しかし、ここで必要なのは圖書編の編纂が行われた時、喻時の古今形勝之図が既に刊行されていたことである。圖書編の巻首の圖書編採輯考証書目には、参考した地図として皇輿図・黄河図・輿地図略・天文輿地略・広輿地図・三鎮閱視図・日本図略の目が掲げられているが、古今形勝之図の名はない。しかし、その華夷古今形勝之図が古今形勝之図を殆どそのまま採ったものであることは、一見して明らかである。尤もそれは必ずしも全くの引写しというのではない。(イ)若干の省略を加えたところ、(ロ)改訂を施したところ、(ハ)原図の地名や記事を誤読したところが、それぞれいくつかある。(イ)省略を加えたものに、地名そのものを（恐らく空間の関係で）省いたもの、地名につけられている説明を削ったものがある。細かい例示は省略するが、最も著しいのは朝鮮・日本・琉球の図を省き、原図に見える地名や記事を頗る簡略にして載せ、しかも朝鮮の場合はその地名の標示の位置が甚だ原図と違っている。これも空間の関係によるのであろうが、省略というよりは寧ろ恣に改めたというべきものである。前に挙げた古今形勝之図の「此説註史、不載誌」とか「此数地名在鑑、不載誌」の句を削ったのも、省略の中に入れてよいであろう。(ロ)改訂を施したものとしては、これも前に挙げた鉄門関のところ「鉄門関、其峽懸崖高数十仞、崎嶇深三里、西北過此、未詳其地」とあるのを「鉄門関、其峽懸崖数千仞、崎嶇深三里、西北過此、難詳」として

いるのも、その一例である。これでも意味の明らかでないことに変りはないが、とにかく原図の文章を改めたものである。改訂の中で最も著しいのは、原図では山東半島が大陸から孤立した島になっているのを、この図では正しく半島に改め、原図に「成化壬辰以前、遭運由此路、三五日至成山、今從閘河、海運不行」と記しながら、成山の位置を示していないのに、この図では成山を山東半島に正しく標示している。これは原図を正しくした一例であるが、改悪してしまった部分もある。その最も著しいのは、朝鮮半島を大陸から孤立させ、鴨綠江を原図の遼水（即ち遼河）に移し、滿洲の奥地から遼東湾に流入しているように示し、遼水はその西の方の小さい川にしていることである。(ハ)原図の記事を誤読しているものとしては、例えば原図に「奴兒干、設都司、俾統所屬」とあるのを「奴兒干設都司」と一連の名称のように記しているなどが挙げられるであらう。

図書編の参考にした古今形勝之図が、今見られる嘉靖三四年（一五五五）重刻のものであるのか、それ以前の初刻のものであるのかは明かでない。（従って華夷古今形勝之図と古今形勝之図との相違が古今形勝之図の初刻と重刻の相違を示すものではないかとも考えられるが、今はそれは図書編の編纂に当って原図に加えられた改変であるとしておく。）しかし、地図綜要の華夷古今形勝之図は明かに図書編の同名の図を引写したものである。それも長白山を長甸山と誤ったり、古今形勝之図に翰海の東南に野馬川四十六処を記しているのを、図書編では空間の都合で、翰海の東北、山脉の北に記入しているのを、地図綜要では全く削除してしまっている。また、地名や記事の囲みのつけ方に異同があり、図書編にはつけられていない囲みが地図綜要にはつけられているというような相違もあるが、とにかく地図綜要の華夷古今形勝之図は図書編の同名の図の引写しである。その結果、今見られる古今形勝

之図の判読し難い文字が華夷古今形勝之図によって氷解される場合が多いのは、後者の特筆すべき効用である。なお地図綜要が図書編の地図関係の部分に負う所はこれに止らない。しかし、今はそれについては触れない。

地図綜要は李金源の鑒定のもとに、朱国達・吳学儼・朱紹本・朱国幹が協力して作った不分巻の書物で、古今華夷形勝之図以下のいくつかの地図とその解説とから成っている。巻首につけられた乙酉春（崇禎十八年、一六四五）の李茹春（釜源）の序には、新安の朱支百（朱紹本）以下の諸人が「坤輿を囊括し、条分縷析して」編輯し、朱支百からそれを示されて序文を書いた次第が記されている。その中に、「今冠盜交訐、脊脊多故、出面在位者、空疎無用、東西冥迷、失洛口則李密無成、塞井陘則韓信難下」という当時にあつては、地図をもとに具体的に天下の形勢を知る必要があることを述べているのは、注目に値する。改訂内閣文庫漢籍分類目録（一三六頁下）にこれを「明李茹春撰、朱国達等編、明刊」としているのは失検であるが、近刊の明代名人伝にこれを三巻とし、その刊行を一六四三年（崇禎十六年）としているのは、明かに誤である。⁽²⁴⁾王重民氏によると、

其図蓋依羅洪先広輿図而増益之、説則參以広輿記・方輿勝覧・輿図備考一類書、在明季通俗地学書中為後出、且為兼衆家之長、

といふ。⁽²⁵⁾氏が果して地図綜要の地図やその説明を広輿図並びに広輿記以下の諸書と實際に比較してみたのか、当推量でそういつているのか明かでないが、地図綜要が華夷古今形勝之図のみならず、その説明の部分で図書編の関連部分を参考していることは、両者を比較すれば直ちに知られることである。今後は、少くとも図書編を参考資料の一つとして挙げる必要がある。

地図総要はイネズス会士ミカエル・ボイム (Michael Piotr Boym, ト弥格、1612—1659) が研究し、それに基いて支那地図帳 *Magni Catay Quod olim Serica, et modo Sinarum est Monarchia: Quindecim Regnorum, Octo-decim geographiae Tabula* を編纂したものであるとされている。ボイムの書入れの施された地図総要とこの未刊の地図帳の稿本とが、今ヴァティカン図書館に *Fondo Borgia Chinese* の一として蔵せられている。⁽²⁶⁾ これは地図総要が十七世紀前半の欧人の支那地理についての知見の向上に役立てられたことを示しているが、古今形勝之図も亦フィリップピン総督からスペイン王フェリーペ二世に送られ、支那地理の理解に資する所があったのである。

当時のフィリップピン総督 (*gobernador*) は第一代のレガスピー (Miguel López de Legazpi, 一五六五—一五七二年在任) の後を承けた第二代のラベサリス (Guido de Lavezaris, ⁽²⁷⁾ 一五七二—一五七五年在任) で、フィリップピン諸島におけるスペイン領土の拡大、その行政の組織化、治安の維持、支那との貿易の促進に努力していた。フィリップピン諸島の占領を企図した海賊林鳳 (Limahon) の艦隊を撃破し、林鳳を逮捕すべく派遣された把總王望高に協力を約束し、その好意によってラダ (Fr. Martín de Rada) 一行を明に送りこんで、貿易の伸張、ポルトガル人のマカオに対抗し得るスペイン商人居住地の設定等を議せしめようとしたのも、この人である。ラダは大明の事情を伝える詳しい報告を残しているが、ラベサリスはラダ派遣以前から鋭意支那に関する情報の蒐集につとめていた。古今形勝之図もそうした用意のもとに集められた資料の一つに他ならない。

本文第三章の(二)「地図の著録」の条に引いたトレスに指摘されているように、ラベサリスは一五七四年七月三十日附の手紙に添えてこの地図を送り、さらにその説明書 (*Relación*) を添附している。(手紙がマドリッドに着いた

のは、一五七五年八月十五日である。)のみならず、この図の四周と図中の何箇所かにスペイン語の書込みがある。この手紙と説明書(共に AG[= Archivo General de Indias]/, Filipinas, 6)も、パラ館長の厚意でその複写を贈られたので、次に手紙のこの地図に関係する部分と説明書の全文とを訳出してみよう。

まず手紙はトレスの「セビア印度古文書館比島関係目録」(第二冊)に一八六八番として登録されているもので、三十一節から成る。第一節から第二五節までは、一五七四年七月十七日に出した書簡の不着を慮って、その内容を繰返したものである。それはフィリッピン諸島の経営についてのラベサリスの政策の基本を説いたものとして頗る重要で、これまでも幾度か引用されて来たものであるが、特にそれまでも行われて来た支那との貿易を一層盛んにする必要を説き、支那から輸入される品目を詳しく列記して、それらがいづれもルソン島では産出されないことを明記している。⁽²⁸⁾ 支那地図についての記述は、それに続く第三十節に述べられているのである。

同時に私は陛下にもう一つの書類を御送りいたします。これは支那人(複数)から手に入れましたもので、それには支那全土の形が記されています。それには何人かの支那人通訳に命じ、支那語を理解する基本を知っているアウグスチン派の僧の助を得て作らせた解説書が添えてあります。これらの支那人は来年もっと詳細正確な地図を私に送ってくれると約束いたしました。それら「が手に入りましたら」必ず陛下に御送り申し上げます。⁽²⁹⁾

ここに解説と訳した原語は(Relacion = Relación)で、地図に記入されている支那文の説明の中から若干を選び、それにAからY(I)までの符号をつけ、それぞれについて解説したもので、横二一・五糎、縦三一・五糎の紙二面に、一〇一行に亘って記されている。

支那人はこの町「マニラ」に支那で作られた一枚の地図を齎した。それに支那大陸とそれに接している若干の島嶼と地図を説明する多くの支那文字とが描かれている。私はこれらの文字とこれらの「地図を齎した」支那人の言うところを通訳を介して理解し、地図を見る人がこれらの文字が何を意味し、これらの人々が何を言わんと欲しているかを知り得るように、ここに説明をする。

これが全体への序論で、次に地図のいくつかの部分に記号をつけ、それに従って解説をする。

※この絵「地図」の北の首部にある六大文字「古今形勝之図」は、大明中華国 (la tierra Taybin tunça) 即ち今と昔の支那、の都市についての叙述であることを意味している。「tunça については後文参照」

この記号は見当らないが、恐らく消えてしまったものであろう。図には古今形勝之図という標題の上に “*descripción*” “*de las ciudades*” “*de la tierra /la/ ybimtungua o china*” “*moderna y antigua*” と書き込まれている。/la/ はその前後の文字が消えていて判読できないことを示す。元来は (de) la (Ta) ybim とあった筈である。

次にこの標題の左、図の左上端に

東方九夷、南方八蛮、／西方六戎、北方五狄、／覽此図、当先以／本朝兩京、拾參省、海宇／為定[?] [?] 番禺
貢九／州地[?] 然[?] 後觀歷代／所觀[?] [?] 易於詳矣、

とある部分の欄外にAという記号をつけ、その説明として、

A昔について知られている所では (segun se sabe de tiempos passados) この大陸 (esta gran tierra) の東方に

「古今形勝之図」について 榎

は九夷 (quise) と呼ばれる人々がいる。南方には八蛮 (padhan)、西方には六戎 (digion)、北方には五狄 (gotec)。皇帝は「その領土を」二つの首府 (dos cabeceras) と十三の王国 (trece reynos、布政使司即ち省をいう) とに分けさせている。土地は非常に広大で、人は無数にいて、全国を往来訪問する。多数の王国 (reynos、省) と行政区画 (gubernaciones、府をいう) がこの順序によって国を形成し、この支配の順序は distay と呼ばれている。都市と民衆とは今も昔に変わることがない。以上がギリシア文字 A の記してある一隅の文章の言う所である。

次に、支那文はないが、朝鮮半島東方の海に b (B) の符号をつけ、

B 項目。B とある所に記すこと次の如し。

この海に半ブラサ「約〇・八三米」ほどの高さの、棘だらけの海草八種がある。また巨大な陸地とその他五つの印いんのような島 (cinco yslas como sellos) がある。「この海に近く」銀に富んだ、農耕者の町があり、tian hoc cog という。日と歳と天候についての知識をもっており、その住民は支那と取引している。「支那から海を」渡ってこの町まで一日半又は二日の行程にある。住民はよく統治されているが、文字を知らない。昔は家をもたなかったが今は城壁に囲まれた町「複数」があり、そのほかにもっと人口稠密な多くの土地がある。しかし「詳しいことは」判らない。

地図の右下端に、前に引いたように、

依統誌集此図、欲便於學者覽史易知天下形勝古今要害之地、其有治邑原無典故者、不充尽列、依覽[?]編集、

とあるが、これにCという符号がつけてある。Cという符号はその左方の琉球の説明にもつけてある。その説明は、琉球、其國。在泉州東海島中、朝貢由福建来、自漢魏以来、不通中華、元使招諭不從、國初其地分為三、今併為一、國無賦歛、不知節朔、視月盈虧以知時、視草榮枯、以計歲、⁽²⁹⁾（○印の文字は圖書編と地圖綜要とで、△印のは明一統志で不明瞭なものを補う）とあるが、このCについては、

C項目。文字Cのある所では、支那文で次のように述べている。

chin chui (泉州) の前面、東の方に、leuguio (琉球) の島がある。それは Huguian (福建) 一名 Ho chui (福州) に貢物 (parias) を支払う。漢王及び魏王の時代には払わなかった。そして三つの州 (provincias) に分れていた。今は支那の皇帝 (el rey) によって置かれた一人の領主 (Señor) と知事 (gobernador) の下にあら。その人が死ぬと別の人が代る。三年毎に朝貢する (paga las parias de tres en tres años)。

と記している。これは明かに琉球についての説明で、必ずしも支那文の忠実な訳ではなく、原文の一部に訳者のもっている知識を加えたものであることが知られる。

Cの二つの記事の中間に、

其海内有小人長人毛人女人川[△]穿[△]の心等。国多、不克[△]尽⁽³⁰⁾、

とある。これにDという符号がつけられている。

D項目。D文字のある所、支那文の言う所次の如し。

この島には一パルモ (palmo、約九インチ) 前後の大きさの人が沢山いる。また二ブラサ (brazo、一ブラサは

一・六七米強)もある人々がいるが、支那人に見られると逃げてしまう。また、野蛮人(galajas)、羽の生えている人、男なしで生活している女達、そのほか胸の中央に穴のある人々、その他詳細不明の人々がいる。

次にEに当るのは、符号が消えているが、地図の左下の次の文章であるようである。

其海内有百花彭亨多国、皆朝貢、難於尽列、惟榜葛刺、其國最大、西天有五印度國、此東印度也、民以耕植、國鑄銀錢、天方國四時皆春、有回回曆、與中國曆、前後差三日、默德那國即回回祖國也、其書体有篆草楷三法、今西洋諸國皆用之、有城池宮室、与江淮風土不異、

百花・彭亨(Pahang)・榜葛刺(Bengal)・默德那(Medina)についての記述である。これをRelaciónではこう説明する。

E。Eの文字をつけたところに記す所次の如し。

空の下にある支那の土地(La tierra de china questa debaxo del cielo)「支那の天下」はここに描かれている。この地図に示すところは支那の全部の町である。よい土地もあれば悪い土地もあり、すべてここに「示めされて」ある。住民はよい人もいれば悪い人もいる。「次に」a los malos la judia los hara buenos es tanta tierra que por mucho que uno sepa noeo alcanzara todo estan aqui solas las ciudades grandes que las peq[ue]ñas no puede ser. 「と記す」。

次に地図には日本について

其国東西南北各数千里、国因近日而名、俗重儒書、古倭奴国、其地有五畿七道、以州統郡、附庸国凡百余、小

者百里、大者不過五百里、漢武帝定朝鮮、使駅通於漢者三十許^{三十三}國、元征之不克、朝貢由寧波來、⁽³¹⁾
とあるが、ここに記号をつけ、これについて次のように記している。

中項目。中字のつけてあるところは、支那文の言う所、次の如し。

これは日本 (Xipon) の島である。周囲は下の方で「即ち東西」五千里 (cinco mil dias) 即ち五百レグア (leguas) ある。昔は Hulhon (倭僞?) と称した。知事 (Gobernadores) を有し、最近では五百レグアほどの地域をもっている。そのほかも大体その位である (o pues mas reciente que tienen unos a cincuenta leguas de destrito otros mas y menos)。支那人と戦争していたが、その後、朝貢するようになってゐる。嘗ては三十年間「支那に」叛逆していたが (otra vez estuyeron levantados por 30 años)、再び帰属し (volvieron a la sujecion)、貢物を lionpo (寧波) の町に送っている。常に多くの海賊船が「支那に」行き、損害を与えているが、この小さな島は支那の領土 (tierra(?) de la China) であり、ここに非常に悪い人を集めている。次に山東半島の南、朝鮮半島の西の海中に、四角に囲んで

成化壬辰以前、漕運由此路、三五日至成山、甚便、今從聞、海運不通、とあるのに、G の記号をつけ、次の如き。

G 項目。海中のこの所に線で囲んである支那文のいう所次の如し。

この湾には G 文字を記号につけてあるが、「そこを船が」航行するのが常である。しかし波が甚だ高いので、大迂回をしてやっと航行するのである。

支那文の言う所と全く無関係であるといつてよい。明かに解説者には支那文の意味がまるで理解出来なかつたのである。解説の第一枚はこれで終つて、第二枚に移る。

H項目。文字Hのあるところの支那文には次の如く言う。

quisuhu (箕子 hu?) は Chyueon (周公?) と呼ばれるその長兄の命令でこの国に派遣せられ、その後、その土地を以て叛し、tia sian (朝鮮) と号し、これを四郡 (cuatro provincias) に分けていた。これに対し、tiao と称する、もう一人の暴君 (otro tirano) が立上つて、知事 (gobernadores) を置いた。大部経つてから (siendo este viejo)、五種類の民族がやつて来てこれを征服した。その中、支那人が勝残り、ques と quan との行政区画に分けた。長さ (largo) 四千里 (diis) 即ち四百レグア、広さ (ancho de laeste veste) 二千〔里〕。支那文字を用いている。

これは朝鮮について述べたものであるが、図には次の文章にHの記号をつけている。

朝鮮、箕子所封之國、漢初燕人衛滿拋其地、漢武帝定朝鮮、分四郡、唐征高麗、置安東都護府、五代時王建、關土^{この字なし}争^{弁の誤刻か}、古新羅百濟為一、其地八^二道、分統府州県、北廣東西二千里、南北四千里、北^二_{要によれば隣}女直、俗柔謹、喜詩書、

とある。図書編・地図綜要には王建を王逮に誤り、「喜詩書」を「尚詩書」に作っている。それはいずれにしても、この場合も解説は支那文の意味を殆ど伝えていないといつてよい。解説は更に前文に続けて、支那の河川について述べ、次の如く記している。

更に (yien) 地図には何条かの彩色された線がある。これらは河川で、支那人の言う所では、それらは一つの池から流れ出し、その水は赤い。その池は Suy guan (水源?) と呼ばれ、その周囲は一百里 (yien diis) を若干越す。その水は非常な勢で湧出しているので逆巻いている。「これに続いて、beuen della corre mucho el agua とあるが、意味不明。」河によってその湖にまで航行するが、或る部分は航行可能であり、他は流れが激しいので (por la mucha corriente) 不可能である。到るところ非常に波立っている (es muy hondable todo)。所によつては四レグアの幅があり (ancha de quatro leguas por partes)、糧食を積んだ大船が航行する。

この記事はこの図の河川のあるものに彩色が施されていたことを示す。圖書編卷三四の華夷古今形勝之図の黄河に黄色を、揚子江に藍色を塗っているのはその名残りとして見てよいであろう。

解説はこれに続けて言う。

更にこれらHの近くにある諸文字の先に別の諸文字がある。その中、文字Y「I」のある所に、次の如くに記す。liauton (遼東) の州 (provincia, 遼東都指揮使司) は大障壁の近くにあり、東西千里 (tits) 即ち百レグア、南北一千六百「里」ある。また、地図には北「に当る部分にある」大文字の近くに一条の線が東から西に走っている。そこに長城 (muralla) が描かれているが、支那人の言う所によると、これが支那の土地を tartaria scitia から分けているのである。その長さは一千レグア、幅は七十ピエ「一ピエは約二八厘」、高さ約十二エスタード「一エスタードは七ピエ即ち約一九六厘、十二エスタードは約十三米五二厘」。障壁「cerca」とあるが、勿論前

の *muralia* のこと」は石灰と石塊とで出来ている。非常に高い塔（複数）がある。支那人の言う所によると、「城壁の」上から「見ると」人間は誠に小さく見えるという。

遼東については、図には

古有郡県、唐太宗征遼、自五代梁初、歷宋、四百余年、皆没於遼金元、天命歸我朝、罷郡県、立衛二十五箇處、設州二、古遼陽、遼金起都、東西千余里、南北一千六百里、本朝雄鎮、加設都台、隸山東、

とある。「東西千余里、南北一千六百里」という数字の基く所は明かでないが、解説の「東西千里、南北一千六百里」がこの数字をとっていることは明白である。万里の長城については、一五七五年のマルティーン・デーラダ（Martin de Rada）の記録にも、「その長さ約六百リーグ、高さ七フアサム、幅は基部で六フアサム、頂部で三フアサム、支那人の言う所では、すべてタイルで覆われている」と見える。⁽³²⁾ *tartaria scitha* (*Tartaria Scythia*) については一五六九年に刊行されたガスバル・ダークルースに詳しい記事が見えている。⁽³³⁾ 解説は右に続けていう。

この長城の外に支那の守備隊 (*gente de guarnicion*) がいる。タルタル人の防備のための障壁であるが (*al luengo de toda la cerca questa a la defensa de los tartaros*)、このように巨大な長城を築造するために、支那人の言う所によると、諸都市で十人のうち四人を抽出して提供し、この仕事を手伝うという。支那の全土と全民衆とのすべてがそれらを掠めようとしているタルタル人から自らを衛るために、これをしている。守備隊「を置くに」先立って、この地図によると、若干の山によって土地をタルタル人のいる地帯から分離し、支

那の領土 (reyno) に近い部分の内側に守備兵のいる三つの要塞が設けられている。その「守備兵の」名は次の通りである。ganbun quan, tay ton quan, canay quan。そして、支那人の言う所によれば、これら要塞の各各に、千五百人 (quinientos mill hombres) の戦闘員 (hombres de guerra) がいる。これらの要塞についてはいろいろと言われているが、どこまで信じてよいか判らないので、ここには書かない。

続いて内地の行政区画に触れ、

更に、地図には四角に囲まれた幾つかの文字「地名」があるが、これは十字の記号 (señal cruces, この cruces という字の上に十が記してある) で、これらは州 (reynos) の首府であり、そこに総督 (bisorreyes, 副王) が住んでいる。十五州がある。

更に、支那人の言う所によると、今「から」四百八十年「前に」lanquian (南京) と呼ばれる省の王が出て全土を支配し、その血統が今日までこの国土を治めて来たが (su linaje gouerno y señoreo lo que aquel gano hasta el día de oy)、「在位」二年にして Leon quen (隆慶) と呼ばれる天子が崩じ、その十三歳の息子が今位にある banlic (万曆) である。海辺にある Hoquian (福建) から王宮 (la corte Real) のある Paquian (北京) まで百二十レグア (ciento y veinte leguas) ある。ポルトガル人が「マカオから」天子のところまで使節を送るにも、同じ「距離」である。

穆宗隆慶帝が隆慶二年 (一五六八) に崩御して神宗万曆帝が位を嗣ぎ、これが書かれた時十三歳であったというのは、後に記すこの地図の全体についてのスペイン文の説明にも見えるところであるが、隆慶帝は隆慶六年 (一五七

一)に崩じている。そしてその子万曆帝十三歳は万曆三年(一五七五)で、この解説の書かれた年に当っている。また、福建から北京までの距離を百二十レグアとしているのも、恐らく六百二十レグアの六を脱したものであろう。大明一統志巻七四に福建と北京との距離を六千一百三十三里としている。これは十里を一レグアとするこの解説の換算率からいうと六百十レグアに当る。またマルティーン・ラダ(一六七四年)によると福州・北京間は六二二 leagues⁽³⁴⁾である。

解説は最後にY即ちIという項目について、次のように記して、その説明を結んでいる。
更にY字を附した一隅にある支那文字の言う所次の如し。

百五十五人の知府(Gouernadores)一名 huiis (府)が支那に在る。これらの人々は更にその手下に二百五十人の magistrados (知州)一名 huy [chuy 即ち州か]をもっている。その他に一千百二十九の quines ([知]県)と称せられるものがあり、その他に huebe (衛)なるものが四百九十三、その他に二千八百五十四の esos (所)に属するものがあり、Sanuya (宣慰司)なるものが十二ある。

その他に Sanbusi (宣撫司)なるものが十一、Chianto anhua (招討安撫司)なるものが十九、tianguansi (長官司)なるものが百七十七。これらのすべてがそれら以外の支那の全部(los demas naturales de China)を支配し、互に相牽制し合っているのである(son justicias puestas unas por otras)。

このYというのは地図右上端にある次の文章につけられているものである。府、老百伍拾伍／州、貳百參拾捌／県、老千老百貳拾玖／衛、肆百玖拾參／所、貳千捌百伍拾肆／宣慰司、老拾貳／宣撫司、老拾老／招討安撫司、老拾

玖／長官司、耆百柒拾柒処。この中、県の数二百三十を二百五十と読違えている以外は、解説はこれらの数字を忠実に伝えている。解説が地図の支那文をほぼ正しく、そしてほぼ完全に訳出しているのは、この部分だけである。

この解説が地図に施されている支那文の説明の翻訳であると称しながら、最後の一条を除いて、実は支那文と全くかけ離れたものであることは、以上述べた所で明かであろう。そして、それはこの解説の書かれた一五七四年当時マニラ方面の支那人及びスペイン人がもっていた支那に関する知見の一端を示したもので、この前後に書かれた同種の記録と比較して考えるべきものであるが、今はすべて省略する。

地図の内部、太倉・常州・鎮江を始めとする揚子江及び福建・広東・広西のいくつかの都市、並びに成都の傍にもスペイン語の書入れが施されているが、いずれもそれらの都市についての説明に相違ない。しかし、全く不明瞭で判読出来ない。ただ地図の枠の外に施された書入れについては、パラ館長が原図からの転写を恵与されたので、非常にはつきりと判る。まず、古今形勝之図という標題の上には、前述の如く

“descripción” “de las ciudades” “de la tierra /la/ ybimtungira ochina” “modernas y antiguas”

とある。クオーティションで括つてあるのは、それぞれが連続せず、飛び飛びに書かれていることを示し、/la/ は「la」は読取れるがその前後は不明と云うことである。この中、/la/ ybimtungira ochina の /la/ ybim は la taybim 即ち大明と読むべく、tungira は必ず tungua の誤読で中華、ochina は o china で「或いは支那」の意である。即ち、「大明中華即ち支那の現在と古の都市及び土地の記述」を意味していること、言うまでもない。「古今形勝之図」という標題の下に短かい二三行の書入れがあるが、それはその下段に北という文字を白抜きで出しているのに対

するもので、「この文字は北である、その言葉〔支那語〕では *pac* と音ずる」と記してある。この地図には真上の中央に北、左右の中央に西・東、最下部の中央に南の文字がいずれも白抜きで記してあり、スペイン語のそれに対応する書入れには北の場合と同様の説明が施され、四隅に東北方・西北方・西南方・東南方と記してあるのについても *Nordest : taypac*〔東北〕以下同様の意訳と音訳とが示されている。

この中、最も長いのは上段欄外の中央に施されているものであるが、それには支那が十五の省 (*provincia*) に分かれ、それぞれ首都をもっているが、その中皇帝の君臨している *paquia* (北京) と *larequia* (南京) の二つは省の都の中には数えられないこと、今の皇帝は十三歳で、その父は *leon quen* 即ち隆慶の二年に崩じたと記されている。 *paquia* と *larequia* とはパラ館長が *paqian*, *lanquia* とあるのを誤読したものであろう。また、隆慶二年は神宗立太子の年で、それを父隆慶帝崩御の年と誤ったものであり (崩御は隆慶六年)、神宗の十三歳は万暦三年 (一五七五) 即ちこの地図がマニラから発送された翌年に当たっている。これらは共に正確を欠いている。

一五七四年七月三十日附のラベサリスの書簡に言及したボクサー教授は、パステルス神父の十分正確でない記事に誤られて、ラベサリスの送ったのが地図帳で、広輿図の初期刊本を指しているのかと疑い、⁽⁸⁹⁾ “but I can not trace no further reference to it in the Seville archives” と言っている。しかし、それがセビリアの古文書館に現存する古今形勝之図であることは、以上述べたところによって明かであろう。また、第三章の始に記したように、プリュッカー神父等はこの古今形勝之図をマテオリッチが一五八四年九月十三日附肇慶発のマカオのロマン (Jean-Baptista Roman, facteur des Philippines) 宛の書簡の中で送りたいと言っている「支那の地図」 (*une carte de*

China) であるとしているが、それが誤であることも、ここに述べるまでもあるまい。⁽³⁵⁾

明末は裴秀の方格図に始まる伝統的な支那地図がヨーロッパの経緯度による地点の標出という様式の輸入によって漸く変化しようとした時期である。それはまた支那を世界とする地理観がヨーロッパと南北米大陸を含む新しい世界観に展開することを余儀なくされた時代でもある。古今形勝之図はそれに先行した皇明輿地之図とともに、朱思本系の地図を祖本とするもので、従ってそれは裴秀図の系統に属するものであるが、土地や民族の沿革を簡単にあっても図上に注した試みは、始めではないにしても、地理学がいわば歴史地理の学であるという、支那の伝統的地理学の一面を発揮し、同時に十六世紀の支那人の国際情勢に対する緊迫感を示しているというべきであろう。

(東洋文庫研究部長)

註

- (1) John Saris (c. 1579—1643. 12. 11) が Bantam で支那人から入手した地図で、四呎以上に殆ど五呎のもの、地図は約一ヤード四インチ四方、残りの部分に支那文の解説が施されている。都市は方形又は円形の枠で囲まれている。Richard Hakluyt (c. 1552—1616. 11. 23) は Saris からこれ入手し、Samuel Purchas (1577—1626. 10. 21) の手で刊行された。図は皇明一統方輿備覽と題し、その他の漢字を一切除き、都市等は方形と円形との印だけで示している。Samuel Purchas, Hakluytus Posthumus or Purchas His Pilgrimes, XII, Glasgo 1906 の四八〇—四

八一頁の間にその縮写が出ている。本文(四七〇—四七九頁) Pilgrimes, III, London, 1625, pp. 401—402 and Pilgrimage, London, 1626, pp. 436—437. cf. C.R. Boxer, South China in the Seventeenth Century, London, 1953, p. 262 notes) に内容の詳しい解説が見える。各省の府州県等の数字が挙っているのび、それらを手懸りに原図の年代を決定することが出来る筈である。Hakluytus Posthumus の初刊は一六二五年。この図は Alvarez Semedo (+1658), The History of that Great and Renowned Monarchy of China, London, 1655 に出ているものと全く同じである。僅かに Purchas が出ている

るマテオリッチ像を歐洲風の服装をした支那皇帝像に代えた所が違うだけである。共に同一の原因に基いたこと明かである。後者は皇明一統方輿備覧の題名を除き、これに代へて An Exact Mapp of China, being faithfully Copied from one brought from Peking by a Father lately resident in that City, 1655 と記している。これについて Boleslaw Sześciński, The Seventeenth Century Maps of China. An Inquiry into Compilations of European Cartographers. Imago Mundi, XIII, 1956, pp. 124, 126 を見よ。

(2) 明代嘉靖以降に多くの地図が刊行せられたことが、そうした時代的背景によるものであることは、王庸氏が既に指摘している(「中国地図史綱」, 北京, 三聯書店, 一九五八年, 七一頁)。この指摘は正しいであらう。

(3) 「大明官制」については、山根幸夫「こうみんせいしよ(皇明制書)」「(アジア歴史事典)・同「大明官制について」(岩井博士古稀記念典籍論集)・同「皇明制書解題」(古典研究会刊「皇明制書」下巻, 昭和四十二年四月)、海野一隆『広輿図』の反響——明・清の書籍に見られる広輿図系の諸図——(大阪大学教養学部, 人文・社会科学研究集録, 第二十三輯, 一九七五年, 二九頁注①)を見よ。大明一統志と大明官制とを参考して最新の地図の作製したこと

は、もと満鉄大連図書館蔵、嘉靖五年(一五二六)二月、楊子器跋の大支那地図の跋に

間常参考太一統志及官制、而布為是圖、比諸家詳略頗異、とあるのからも知られる(青山定雄「古地誌地図等の調査」, 東方学報, 東京, 第五冊統編, 昭和十年七月, 一四八頁)。デストムプ氏等には大明官制が書名であることが判らなかった。それで氏の論考にはこの部分を *Maintenant j'examine cette carte et je la compare au Yi tong tche officiel des Ming* と記している(JA, 1974, p. 200)。なほ、氏は王洋の識語に記されている各省の府州県の数を九個所に亘って写し違えている(JA, 1974, p. 197)。

(4) 大明一統志卷八九、女直、山川の条に

忽刺温江、在開原城北九百里、源出北山、南流入松花江、

と見える忽刺温である。神田信夫「かいせいじょちょく(海西女直)」「(アジア歴史事典, 二, 一〇二頁)を見よ。

(5) 王洋の伝記については国朝獻徵録卷八八・本朝分省人物考卷五一・嘉慶山陰縣志卷十四(鄉賢)・古今圖書集成(字学典卷二二四)・光緒肇慶府志卷十二(職官)を参照した。その肇慶における活動並びにマテオリッチの世界図との関係については Pasquale M. D'Elia S.I., in Mappamondo Cinese del P. Matteo Ricci S.I., etc., Città

del Vaticano 1938, p. 21 ff.: *Do*, Fonti Riciane, 1 の関係部分 (cf. III, Indice analitico sotto Uamppan [Wang Pan]) を見よ。

(6) JA, 1974, p. 198 n.8.

(7) 王庸「明代輿図彙考」「総図之部」図書季刊第三卷第一・二期(一九三六年)、七四八—七四九頁。王氏は桂萼の図は李黙の天下輿地図一卷を盗んだものであるとする。また、四庫提要卷七五は修攘通考の編者を何鍾とするのは坊間の偽託かと疑っている。

(8) 海野一隆『広輿図』の反響——明・清の書籍に見られる広輿図系の諸図——(大阪大学教養部、人文・社会科学研究集録、第二十三輯、一九七五年、六—七頁にその内容の紹介がある。

(9) 桂萼図はいろいろな名称で呼ばれた。(7)に引いた王庸の論文を参照せよ。

(10) 最も新しいものは Dictionary of Ming Biography 1368—1644, 1, N.Y.: Columbia University Press 1976, p. 982 Lo Hung-hsien (羅洪先) を挙げたい。広輿図について、大坂大学の海野一隆氏が一連の詳実無比な研究のあることは、ここに記すまでもないであらう。

(11) 青山定雄「古地誌地図等の調査」(東方学報、東京、第五冊統、昭和十年七月、一四七—一五二頁、宮内庁書陵

館「和漢圖書分類目録」ト、一—二六頁。

(12) Hiroshi Nakamura, Les cartes du Japon qui servaient de modèle aux cartographes européens au début des relations de l'Occident avec le Japon, Monumenta Nipponica, II, 1939, 104 et n. 20.

(13) W. Fuchus, Materialien zur Kartographie der Mandju-Zeit, Monumenta Serica, 1, 1935, p. 390 n. 23 臨泉堂は文臺屋治郎兵衛(中村氏)。延宝—天明(一七四八—一八八)年間に諸本を刊行した(井上和雄編「慶長以来書寶集覧」、大正五年、京都叢文堂刊、八四頁)。

(14) 「改訂内閣文庫漢籍分類目録」一三六頁上段。

(15) 長崎のことは Dictionary of Ming Biography 1368—1644, II, pp. 1495—1497 を見よ。

(16) その経歴と業績については Homenaje a D. Carlos Sanz (Publicaciones de la Sociedad Geografica, Serie B, Número 484, Madrid, 1968, 19 pp. を見よ。

(17) JA, 1974, p. 208 et note 34.

(18) Jose María de la Peña y (de la) Cámara: Archivo General de Indias de Sevilla, Guia del Visitante, (Ediciones Conmemorativas del Centenario del Cuerpo Facultativo (1858—1958), XIII), Madrid, 1958, p. 61.

(19) Relacion descriptiva de los mapas, planos, etc. de

Filipinas existentes en el Archivo General de Indias por Pedro Torres Lanzas, del Cuerpo de Archiveros, Bibliotecarios y Anticuarios, Madrid 1897, p. 6 = Retana, p. 448. フォンズ氏は一九二五年から四半世紀に亘つてインディーズ総古文書館の館長をつとめ、古文書の目録編纂刊行に著つた貢献をした(注②)といふた Archivo General de Indias de Sevilla, pp. 59, 87, 89, 92, etc., etc.)

- (20) 乾隆龍溪県志卷十二名宦及び職官。光緒漳州府志卷十一職官。

- (21) W. Rickmer Rickmers, The Duab of Turkestan, Cambridge, 1913, pp. 476—477.

- (22) 国立中央図書館編「明代伝記資料索引」台北「民国五四—五五年」六六九頁。

- (23) 国朝献徵録三三三所収の王世貞の諭司徒時伝(趙用賢松石齋集)卷三三「少司徒諭公諱、乾隆光州志卷五一(光緒光州志卷八)」、本朝分省人物考卷九三「明詩綜卷四二」千頃堂書目卷二三等を参照した。

- (24) この刊行年代は Dictionary of Ming Biography 1368—1644, I, p. 311—312 (under Michael Piotr Boym, L.C. Goodrich and B. Szeześniak 共同執筆)°。その刊行は明末、序文の書かれた崇禎十八年(一六四五)かそれ以後とされるほかない。

- (25) A Descriptive Catalogue of Rare Chinese Books in the Library of Congress, I, p. 311—312.

- (26) Dictionary of Ming Biography, I, p. 21 : B. Szeześniak, The Atlas and Geographic Description of China: A Manuscript of Michael Boym (1612—1659), JAOS, 73, 1953, pp. 65—77: Do., The Seventeenth Century Maps of China, An Inquiry into the Compilations of European Cartographers, Imago Mundi, 13, 1956, pp. 116—136. 彼の他 H. Cordier, Bibliotheca Sinica, 2nd ed., V, 3644, 及び J. Dehergne S.J., Répertoire des Jésuite des Chine de 1652 à 1800, Roma-Paris, 1973, pp. 34—35 にも著者の諸論を参照せよ。

- (27) ミンナリスの名は当時の文書に十五に近く異つた綴り記われている。例へば Blair, E.H. and Robertson, J.A., The Philippine Islands, LV, p. 509 を見よ。フィリッピン総督に就任した時は既に七十を越える老齢であつたといふが、何をなすべきかを十分に知り、極めて積極的によの具体化を進めた人である (C.R. Boxer, South China in the Sixteenth Century, London 1953, p. xlii)°。彼の経歴はメタナの表示に依る所が最も簡単で要を得ている (Sucesos de las Islas Filipinas por el Dr. Antonio de Morga, Nueva edición por W.E. Retana, Madrid, 1909,

p. 544)。更に詳しくは、本文第三章に古今形勝之図を紹介したものの第二として挙げたモンテロ氏の記述(D. Santiago Montero Diaz, Aportaciones geográficas del Gobernador de Filipinas Guido Lavezares, Boletín de la Sociedad Geográfica Nacional, LXXIII, 2, 1933, pp. 67—71)及び右に引いたボクサー氏の著書を参照せよ。モンテロ氏はラベサリスの統治時代はスペイン支配時代の初期のフィリピンで最も安定した、豊かな時代であったと述べている(*op. cit.*, p. 73)。

(28) D. Pedro Torres y Lanzas, Catálogo de los documentos relativos a las Islas Filipinas existentes en el Archivo de Indias de Sivilla, II, (1573—1587), Barcelona, 1926, pp. 10—11. 全文は(27)のD. Santiago Montero Diaz, Appendice I, pp. 77—85に原文が、Blair and Robertson, The Philippine Islands, III, pp. 272—285にその全文の英訳が掲げられている。この手紙はランサリスの比島経営の方針の全貌を示すものとして重要であることについては、(27)に引いたボクサー氏の著書及び最も新しいものとして María Lourdes Díaz-Trechuelo Spinoia, Arquitectura Española en Filipinas (1565—1800), Sevilla, 1959 (Publicaciones de la Escuela de Estudios Hispano-Americanos de Sevilla, CXVII), p. 24 を見よ。なほモ

ンテロ氏はこの手紙のレジュメが当時作られていたことを指摘し、その論文の Appendice III (pp. 90—91) にその全文を掲げている。但し第一節から第十一節までの概要に止まる。なほ氏の手紙の原文の写しは頗る不正確である。

(29) 琉球についての古今形勝之図の説明はすべて大明一統志卷九十(琉球の条)の文を節略したものである。今詳しくは述べない。注(28)の目録に附載されているバステルス神父の「比島史概説」(Historia General de Filipinas por el P. Pablo Pastells, S.J., p. XXII)にこの天下形勝之図について、ランサリスがこの手紙で、「琉球及び日本に関する記事と共に、この王国(即ち支那)の全形が記述されている」(se hallaba escrito y figurado de molde Todo este reino, con noticias relativas a los Lequios y al Japon)と述べているように記しているのは、必ずしも正確ではない。なほ、ラベサリスはこの手紙の第八節で「必要な人数と船が出来たら琉球諸島を発見に〔即ち征服に〕行きたい」と述べている。

(30) 図書編に「海内有人小人長人毛人女人穿心等多国、不克[△]俗[○]備[○]の列」とある。「多国」は「国多」の例置であらう。この穿心を古今形勝之図に川心に作っている。或いは古今形勝之図の初刻には穿心とあったもので、図書編は初刻によつて華夷古今形勝之図を作り、地図総要は更に図書編の

図を写したのかも知れない。

(31) 図書編・地図総要に

日本、国以近日而名、広数千里、古倭奴国、設五畿七道、漢武帝定朝鮮、使訳于漢者三十余国、元征之不克、朝貢由寧波而入、

とある。「使訳于漢者」は古今形勝之図の「使訳通于漢者」がより正しく、「三十余国」はこの方が正しい。この部分は大正一統志巻八九日本の条によったものであるが、一統志は「三十許国」に作る。寰宇通志巻一一六同じ。「三十許三国」は「三十三許国」の誤であろう。地図総要の華夷古今形勝之図には「三十余国」に作る。

(32) C.R. Boxer, *South China in the Sixteenth Century*, London, 1953, p. 263.

(33) Boxer *Ibid.* pp. 69-70,

(34) Boxer, *Ibid.*, p. 270.

(35) Boxer, *Ibid.*, p. xliii n. 2.

(36) 日本地理学会 Joseph Brucker, Note sur une carte supposée du Père Ricci, Atti e memorie del Convegno di Geografi-Orientalisti tenuto in Macerata il 25, 26, 27 Settembre 1910, Macerata, 1911, pp. 85-87 及び Ettore Ricci; Del valore geografico dei Comensararii del P. Matteo Ricci, *Ibid.*, p. 198-179 及び

よ。リッチの Giambattista Roman 宛の手紙は M. Ricci, Le lettere dalla Cina (1580-1610), ed. by Tacchi Venturi, Macerata, 1913, pp. 36-49, 地図のうちは p. 39 に記されている。このリッチの手紙とそれに加えられたロマンの追記がテルヌー・コムパン (H. Ternoux-Compans) によって刊行されているというのが (Bibliotheca Sinica, 2nd ed., 1, Col. 7), 未見。

追記

国立大阪大学の海野一隆教授から皇明一統地理之圖 (楊子器跋、清泉王氏重刊、嘉靖十五年) 及び乾坤万国全圖古今人物事跡 (萬曆癸巳の刊記がある) がいずれも一枚刷の明代の支那全図として存在し、奈良女子大学の船越昭生教授にこれらについての発表がある旨を教えられた (奈良女子大学文学部、研究年報第一九号、一九七五年及び人文地理、第二七巻第一号、一九七五)。なほ、後者については第三回国際地図史学会 (一九六九年) に於いて H. D. Talbot 氏の講演 (Imago Mundi, X XIV, 1970, p. 95) 及び大英図書館主催の支那・日本地図展 (一九七四年) 目録 (C 5) と Howard Nelson 氏の記述 (Chinese Maps: An Exhibition at the British Library, The China Quarterly, April-May 1974, p. 360 and the photograph to p. 358) などを参照せよ。

古今形勝之圖

東方九夷南方八蠻
西方六戎北方五狄
重北固當先以
本朝所定格致有元
州地一後朝歷代
所編一易於詳矣

古今形勝之圖
全圖
古今形勝之圖
全圖

